

「監憲録・浜松告稟録」

——史料翻刻—— (三)

神 崎 直 美

「自文政十二年巳丑正月

至天保二年辛卯十二月

浜松告稟録

四・五・六

」 (表紙)

御書付

目録

〔宋筆〕
○文政十二年正月

〔宋筆〕
一一同 御目見之節、御目付出席場之事、

〔宋筆〕
一一同 綿服給之事、

〔宋筆〕
一一同年二月

〔宋筆〕
一御歸府之節御次第書之事、

〔宋筆〕
一御宮御預之者名目之事、

〔宋筆〕
一御着城御次第書之事、

〔宋筆〕
一御勝手方

〔宋筆〕
一御勝手向御主法之事、

〔宋筆〕
一御小納戸各諸向江談之事、

〔宋筆〕
一御着城御次第書之事、

〔宋筆〕
一御納戸各御取次江引合之事、

〔宋筆〕
一同年四月

〔宋筆〕
一御役成御赦宥帳之事、

〔宋筆〕
一寺院作事等承届之事、

〔宋筆〕
一老共手限御答御仕置之事、

〔宋筆〕
一同年六月

〔宋筆〕
一小役人并組之者進退御定之事、

〔宋筆〕
一御歩士之者進退御定之事、

〔宋筆〕
一給人以上以下役成・役替等之事、

(2)

〔同年七月〕

〔宋筆〕一 御咎被 仰付候者再勤年限之事、

〔宋筆〕一 小役人役付等之事、

〔宋筆〕一 御分限帳之事、

〔同年八月〕

〔宋筆〕一 御咎中病死等いたし候者之事、

〔宋筆〕一 小役人明跡人撰仕方御規矩之事、

〔宋筆〕一 小役人転役順評義之事、

〔宋筆〕一 士輕諸役順調之事、

〔同年十二月〕

〔宋筆〕一 御家老・年寄并諸役人忌 御免日数之事、

〔宋筆〕一 右同断忌 御免日数評儀之事、

〔宋筆〕一 御家老・年寄并御用人忌中 御尋之事、

〔宋筆〕一 浜松ニ而士輕着服之事、

〔宋筆〕一 文政十二年巳丑正月

丑正月

一 同目見之節、目付出席場所之儀

二 付、猶又相改候様申遣候書付、

一同目見之節、目付役ニ者行儀為見豫、目見之方江者不加平伏茂不及致旨、先年申付候後、其姿相成居候得共、着座ニ場所代り候迄ニ而見豫も不相成候、一体 公儀ニ而御目付者一同御目見之者之後ニ

居、一同平伏之時一寸膝を突候計ニ而、一同之行義見豫候事ニ付、

前件之通先年申付候事ハ、何れ前例ニ而者一同之行義も不相分候間、

以後者目見之者之後ニ列を離れ、立居一同平伏之時膝を突候計ニ、

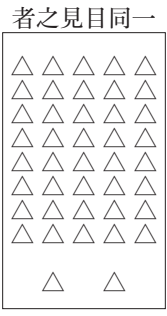
たし候様、此度分相改可申候、右者全役柄ニ付義ニ而、格式等ニ不抱

事ニ候間、是等程能相様申論、出席場所繪図等を以、為伺可申候、

右之段、浜松江可申遣、同所相済候ハ、江戸表も相改候様可申遣候、

丑正月

廉 繪 図



目付 同

一同目見之時、目付出席此姿ニ相成候事ニ候、尤、場所ニも寄可申候間、差略有之候得共、本儀之處為心得認候、明日日本陳ニ而目見之節分茂可改候間、為含浜松江茂此儘差遣可申候、明日之処者不及伺、老共限リ此図ニ見合取極候様可致候、

廿三日

〔宋筆〕一 綿服給之事

浜松ニ而綿服之儀、一同江申付候、木綿之綿入者着用悪鋪物故敷、

近來国持大名など家来多分綿服之處、冬ニ而茂上着之木綿服者、袷を着用いたし居候、此後茂老共初冬ニ而茂、上着綿服者袷ニ而不苦候勝手次第なかし、此段申遣置、目付江茂無急度相達、問合之面々江者、其通答候様いたし可然哉之事、
同年二月

〔三〕
(朱筆)

浜松江心得ニ申遣候

婦府之節浜松ニ而

一着日者、彼地ニ而取調、夫々相伺可申事と存候、
一翌日左之通、

一御宮参詣、

狩衣

但、前夜より請、

一奉射的仕形一覽、

但、帰リ掛ケ、

一婦之上、家督初而目見、物奉行手熨斗、其外目見可有之事

候、

一老共初諸役人達之事、

一昼後、鷹野供ニ而、三方ヶ原一覽、

一帰後御下屋敷江相越候積リ、

但、是ハ老共無構、

〔四〕
(朱筆)

浜松江可申遣事、

御宮預、先日名前之内ニ而士分三人程・輕輩五人程可申付候、

士分者

御宮執忌鑑役

輕輩者

御宮木綿人

右之通可申付、婦府之節参詣前迄ニ可申付様存候、

丑二月

〔五〕
(朱筆)

覚

一着城次第書之通ニ而可然候、尤供方ニ而茂心得居候様可達候、

一水野亀太郎、初礼受候事、先刻者翌日与申候得共、着日之方可然候間、居間着座着之次第相濟候上、直可差出候、

一年寄役之儀着座候上、直可申渡と存候、

一目見之者、当日ニ而可然候、居間相濟、夫々都而可談受候、

一通行有之節、兩番所馬廻出候儀、是迄之通可然候、左すれハ、主人通行之節も出候而不呉事と存候、評義次第ニ而可取極候、

一幕之義同斷、

但、右式ヶ所共着発、又者通行等之事而已也、逗留中等ハ、如常々可致候、

一半兵衛手熨斗伺之通可然候、

一見豫目付出席場、絵図面之趣ニ而者、先年之節も同様ニ而、此度本

陳ニ而之見豫方ニハふれ申候ハ、猶評義いたし、途中迄来ても伺

候様可致候、

評義者老共限ニ而可然候、

三日

御別紙

一統目見之節、目付出席之儀ハ、昨日申付候、猶以絵図可伺候、

右見豫計ニ相成候而ハ、勝手役目見之廉ぬけ可申間、以来ハ目付

役之内、忝人ハ勝手諸役人目見之方江加り、席順ニ着座可致、目

見候外者、見豫可相勤、又見豫場所多く候時ハ、其日限馬廻りよ

り幾人ニ而も雇候様可致候、此段も浜松江申遣候ハ、早く評決

可有之存候、

〔朱筆〕
〔六〕

封

老共江

〔御勝手方江被成下〕

勝手向之儀、浜松・江戸一致之主法可相立旨、奥吟味役等申出候

得共、借財多之時節ニ而者、迎茂可致出出来義ニ無之、殊ニ御譜代

ニ而者不計御用向等も有之、外様同様之義ニ者不参事ニ候、依之先
当分之処、左之趣ニ者相成間敷哉、

一浜松ニ而者、当時之城附高越目当ニいたし可取計事、

右之内

一江戸家中扶助米等、是迄之通可取計事、

一拝借金年賦上納向、是迄之通可取計事、

一東都・撰・河・江州等、借財向如何様とも主法相付可取計

事、

但、下ヶ条江戸臨時之運送相止候而、此ヶ条引受取計出

来可申と存候事、

一江戸者八千兩等切之積ニ、以前相極候得共、臨時之廉者不残浜松

分相送候事故、定高之詮無之候、依之以後、撰・河・江州等、飛

地領分之取納高、凡、九千兩余ニ相見へ、右ニ而取計候目当を以、

年々九千兩ツ、運送与可相極事、

右之内

一家中金給等、是迄之通可取計事、

一臨時入用・嫁娶等之儀有之候とも、一廉ニ・三千兩迄之處

ハ、浜松分不及運送、江戸限借財等ヲ以、如何様とも可取

計事、

一火災其外格別大金之入用ニも相成候之節ハ、浜松江相談之

上、別段運送等ニも可相成哉、依其時、取計可有之事、

右之通ニ而、五ヶ年之間江戸運送九千兩と相極、臨時入用等有

之候共、前條之通容易ニ浜松ニ而者不引受積、尤、追々主法相付候て、少々宛茂減少相成候ハ、其高分者、運送相減可申候、浜松ニ而も前件ヶ条之分ハ、如何様共致手段取計候ハ、却而條理も付可申と存候事、

但、兩地共前件ヶ条ニ相洩候義候ハ、追而取調可申事、

〔七〕
(朱筆)

丑二月

小納戸ヶ諸向江談之儀ニ付、書付

小納戸ヶ諸向之用談之儀、勝手役之義ハ是迄之通、直ニ其役江可申談、表役并外様之向江談之儀者、目付取次を以可申談候、諸向よりも同様可相心得候事、

但、右筆等ハ、勝手役之内ニ而も、少筋も違候間、直談ハ致間敷候事、

右之趣、小納戸目付并諸向江も無急度達置候様存候、

二月

右書付、此地相濟候者、江戸ニ而も同様申達候様可申遣候、

〔八〕
(朱筆)

書付

見豫目付絵図之内

一物奉行者頭之分者、人数少一列ニ付不及見豫候、
一医師之處ニも不及見豫候、

一発駕之節、勝手役人目見之着座者、何茂溜之間、国外江不出候様為着座可然候、見豫目付ハ、附紙之通ニ而可然候、

一此度茂、御黒印者無之候事、

一絵図之外、右之外ハ評義之通ニ而宜敷候、目付も老人ハ勝手役之内ニ而、目見いたし候事と存候、

一着城次第ハ、供方も相心得候様可致候、

一居間并大書院、札次第書、小姓共不相心得候而者、不都合ニ候間、前以渡置候様存候、右札者、着当日受候事ニ候、其段可申遣候、

〔九〕
(朱筆)

丑二月

小納戸ヶ取次江引合之儀ニ付、申遣候書付、

小納戸ヶ表向江直掛合不致様申付候ニ付、到来物取次ヶ直小納戸江相渡候節之義、天兵衛相伺候節、目付立合可然旨申付候得共、事多之時分不都合之由ニ候間、右請取渡計者、是迄之通、小納戸取次、直引合ニ而可然候間、其段夫々江可申達候事、

丑二月廿九日

同年四月

〔朱筆〕
〔十〕

丑四月
此度御役成り赦宥之儀ニ付、
申遣候書付、

大赦宥伺書、何茂附札之通ニ而可然候、

但、二本松一介義ハ、外と茂違ひ候間、赦宥帳面ニ不書戴候様、
此前申遣置候事ニ候、以後共、不書加候様可致候、

御別紙

〔朱筆〕
〔十一〕

寺院作事等も、老共手限ニ而承届相済、帳面書付等差越候
節者、仕置伺之帳面同様、肩江致朱書可差越候之様可申遣
候、

四月

御別紙

〔朱筆〕
〔十二〕

老共手限ニ而咎仕置相済候分、并郡奉行限相済候分共、帳面
差越候節者、張紙之通朱書いたし可差越事、

丑四月

同年六月

〔朱筆〕
〔十三〕

志
評義之事

小役人并組之者、其外共、頭支配之見込を以進退いたすへき儀、相
当之處、当時ハ取人而已ニ相成居候間、銘々之勤、前ハ少々疎ニ候
と茂、取へき方之頭支配ニ見立られ候を、專一ニ心掛候様ニ成行、
真之頭支配、役成ハ一向不相互、名目計ニ而、却而不取締之筋ニハ、
依之以来小役人明跡有之節、取人之儀者一切相止、其場所相応ニ而
可用立者者、頭支配見込を以、随分入念致吟味、其段書為出、其中
猶又人撰ニ而、夫々可申付候、

但、明跡有之頭支配取人之儀ハ、本文之通相尋候義も可有之候、
乍去、此儀ハ無據節計ニ而、成丈不相尋候様可致事、

右之通、以来可致改革と存候、致評義存念茂無之候ハ、浜松江申
遣、猶又評義之上申越候様可申遣候事、

丑六月

〔朱筆〕
〔十四〕

二
評義之事

歩士之者進退之儀茂、歩士頭見込を以、文武・芸術・筆算等致吟味、
年数も有之分者、以来別紙同様為書出候方、可然与存候、此義も同
様評義可有之事、

丑六月

〔朱筆〕
〔十五〕

丑六月
役成并役替申付之義、致評義候様
申付候書付、

給人以上役替之儀、徳照院様思召ニ而、不殘御直ニ被、仰付ニ相成、其後、当代ニ而以前之姿ニ復し、役筋ニうり直申付、其外ハ次ニ而之申渡之積り候處、近頃迄直申付候次第、以前と替り役筋ニより差別有之様成行候も、不相当ニ付、以後ハ、徳照院様御代之通、給人以上之分役成・役替とも直申付ニいたし、并中小姓役之分、役成・役替とも次ニ而申渡、其後居間ニ而可入念旨直申付候様可致与存候間、浜松江茂申遣、評儀之趣可承候、
同年七月

丑七月

〔朱筆〕
〔十六〕

咎申付候者再勤年限之義ニ付定

惣而役義番方不相応、又者不束有之咎申付候者、再勤褒賞等之年數定茂無之候ニ付、格別遅速茂有之、自然と咎品輕様ニ相心得、却而不取締之儀ニ付、公儀御定とも見合、以来左之通相極置可申候、

一 役義番方不相応ニ而茂、又者公私ニ付不束有之、寄合小普請入差扣以上之咎申付候者ハ、十五・六年、又者二十年も過候後、再勤之儀取調可申候、

但、元場所江茂可申付候、

一 褒美等之儀も、年數之内ハ不申付候事、

一 出役之儀者、十年も過候ハ、不苦候、

一 役義不相応、又者公私ニ付不束有之、番入差扣以上之咎申付候者、十年も過候後再勤之義取調可申候、

但、出役之義、五・六年も過候ハ、可申付候、其外前件但書

与同様之事、

一 表向江願し候品者無之候とも、咎筋ニ而寄合小普請入申付、差扣も不致者ハ、七・八年、又者十年茂過候後、再勤之儀取調可申候、

但、前件同事、

一 役人之内前同様品無之番入申付、差扣も不致者ハ、又五・六年過候後、再勤之儀取調可申付候、

但、出役之義者、三・四年茂過候ハ、不苦候、其外前件同事、

一 役人番方共、身分其儘ニ而差扣而已申付候者ハ、五・六年も過候後、輕進役付等之儀取調可申候、

但、前件同事、

一 存寄有之役儀差免之者、咎之有無共、都而前件同様之事、

但、側向之者ハ存寄を以再勤も可申付候得共、大体者前件之本^{本ノ}準可申候、

一 輕輩共ニも右ニ準可申候得共、分而小給之者ともニ而、一樣ニ者可難申付ニ而候、是者咎之重きハ七年、輕きハ四年程も過候後、再勤取調可申事、

但、出役之義、重きハ三・四年、軽きハ二・三年も過候ハ、
不苦候、其外前件但書同様之事、

一士輕共一旦咎申付候者、前件年数之内、又候咎申付候ハ、後之
咎より之年数を以取調可申候、

右之通相心得、年限相立候上^三而行跡等之儀吟味いたし、取調可
申事、

丑七月

御別紙

〔^{〔朱筆〕}十七〕小役人役付之儀、取人相止メ候評義相濟候得共、右^三付猶
又添書付類も有之候間、夫迄者只今迄之通^三可取計置ハ、

浜松江茂可申遣候、

御別紙

別紙之義、以来可相定与存候間、評義いたし存寄無之候ハ、浜
松^三而も評義いたし候様可申遣候、

六月

御別紙

〔^{〔朱筆〕}十八〕分限帳大分あらたまらず候、前月位迄之處者改すとも、夫
令以前者調方^二て、随分間^二合可申候、以後下方^令いたし候
とも、一応見改為直候上可差越候、左もなく^てハ、折角引
替候ても見合^二相成兼候間、以後見改候上可差越候、此度

之分も早々為改可差越候旨、浜松江可申遣候、
同年八月

丑八月

〔^{〔朱筆〕}十九〕 咎中病死等いたし候者之義^二付書付

咎中病死等いたし候者ハ、家督預・養子預等も不相成候之間、其
家断絶之事、実子・養子等呼出有之候者ハ、本高^令減候而改而宛
行可申、呼出無之者ハ、猶又本高相減、給人者無足^二もいたし、
改而呼出可申候、

一塾居之者致病死等候ハ、前件之通取計可申事、
一閉門差扣等者、日数を以差免候間、慎中大病及候とも、別段届^二
不及、慎差免相成後、願書等之手配取調、弥及大切^二候者、其節
可為届事、

但、此一ヶ条者、家中^二而茂兼而心得居候様可致候、
右之通相心得取計可申候、

丑八月

御別紙

咎中病死等いたし候者之儀、別紙之通可相定与存候、無存念候ハ
、浜松へ可遣候、

〔朱筆〕
「二十一」

丑八月

小役人明跡人撰仕方規矩書付

小役人其外明有之節、取人相止、頭支配分爲書出候事ニ相定候間、以來明有之節ハ、左之通、

一小役人明有之時、此度何役明跡へ、場所相応之者も有之候ハ、可書出旨、其筋之役々江以書付申達、書出し候者者、名前・役名・年付・取高・勤年数等、不洩様書立ニいたし、其中ニ而相応之者を、兩人程撰ひ書出し候、頭支配江老共列座ニ而、右人体相尋、相応之者と申候者、其名前を認可候、

但、步横目吟味方、奥館口番等者、其支配江茂本文書出し之内ニて、見込之もの相尋、申立候人物無差支候ハ、其者を如本文書出し候、頭支配江列座ニ而尋之上、認可候、
一右之外之役ニも、時宜ニ分候而ハ、書出し候内ニ而、見込之者有無可相尋候、勿論定例之様ニ相成候而ハ、不宜候、

一同之上、人体相定候者、申渡等如例可取計候、

一前件諸頭支配分書出し方之儀者、其者之名前肩へ、役名脇へ、年齢上江、取高同脇へ、役金等認、右之者年号月、何役江被呼出、何年相勤、其後某年月何役ニ申付、何年相勤加増并勤金・役金等下置候、年月共且差扣以上之咎有之候、年月逐年認連、某年月書役へ申付、当支干年迄幾年出精之奉公振、勤功并猶又頭支配之見込等、委敷可為認事、

但、人撰有之節者、必組下支配下等分可書出ニも不及候、其時相応之者無之ハ、当時組下支配ニ可書出者無之段、可為申遣事、

一前件老共列座ニて尋之義、物奉行・者頭者一組ニ相成居候間、其頭老人呼出可相尋、目付・吟味役・大納戸奉行、其外之諸役とも一同ニ而支配いたし居候分者、其老役不残呼出可相尋候、尋方之儀者、懸り之老分、此度組か支配か何役も書出候場所相応之者ニ候哉、病身ニ者無之哉、心障之儀も無之哉など、相応ニ相尋可申、何も無別条答候ハ、可承置旨可申達候、

但、列座ニ而尋候者、書上候人体を為受合姿ニ候間、右之者書上通、軽役之後不恙有之、重咎等申付候時ハ、右列座ニて尋請候元之頭支配、可為不念候事、

右之趣ニ取計人撰之上可候候、勿論諸向江委敷為心得候ニ者不及候、全之内規定いたし置可申候、猶相洩候儀も候ハ、取調可候事、

丑八月

御別紙

規矩別紙之通ニ而無差支候ハ、此節分可取行候間、浜松申遣候事、尤、浜松相濟候之上、此地ニ而可初候、

大意

諸向頭支配、又者其筋も重立候者、銘々之見込を以、下方進退はたさすへき義相当之処、当時ハ取人而已ニ相成候間、下方之者共持前之勤方ハ、少々疎ニ候と茂、取へき方之頭支配等ニ被見立候儀、専一ニ心掛候様ニ成行、頭支配等之節目者不相互、却而不取締事ニ候、依之以来役人明跡有之節、取人之義相止メ、其場所相応ニ而可用立者ハ、頭支配等之見込を以、随分入念致吟味書出可申、其中ニ而猶又人撰之上可申付候、

右之通、以来改革相成候間、諸向とも愈致精勤、撰拵相成候様可心懸、頭支配等ニ而も、萬事無油断致世話、諸芸等為相励、格別用立候者多出来候様、可心掛候事、

御別紙

小役人明跡有之時、諸組支配合書出し候事ニ相成候ハ、頭支配ニ而茂不心得候而者不都合ニ候、依之何とか書付ニいたし可為知哉、別紙者一通趣意之處計書取候事故、右ニ不拘下方氣受宜敷様ニ取直し可為心得候、浜松相濟候ハ、此地ニ而も其通可心得候、

壹

士輕共答申付候者、再勤并加増褒美等之儀、是迄ハ年数ニ不拘取計有之候得共、以後者答申付候者、其次第二ハ年数を以取計有之候間、頭支配等も兼而其心得可有之事、右之趣者、一応家中へ無急度触置候者、却而銘々之慎ニも可相成哉、

必前文之通と申ニ者無之文言致差略、いつれ年数何年等之儀、其外委鋪義者内規矩之事故、表向江可為知事ニ無之、只大凡前文位之処、無急度為知候而者、如何有之へく哉、浜松江も申談同様可為知事、
丑八月

貳

別紙之通申触候者、頭支配合申立之年数ニ心得方可伺出哉、其節者答申付候者ハ、三・四年茂過候ハ、諸事を可申立、夫までハ扣候様、其外之儀ハ逐々外向取計見聞いたし、差略も可致出来候間、委敷申聞ニ不及事、

但、三・四年過申立候得者、必定其通相成候事ニも無之、其次第二よつて差略有之事も可為心得事、

御別紙

〔廿一〕^{〔朱筆〕}小役人之儀、是迄者何役江何役与進候と申境も無之候得共、右体其筋を立候者、何役江者何之役組等ハ相転候様之分限も付可申哉、浜松ニ而評義之上、委敷認差越候様可申遣、

御別紙

〔廿二〕^{〔朱筆〕}一士分諸役順相調可差越事、一輕輩諸役順同前、

一 別段勝手役表役之分、役名仕分可差越事、
但、輕輩同事、

右、浜松江可申遣、
同年十二月

〔朱筆〕
〔廿三〕

丑十二月

忌差免日数相定候書付

親族之忌中ニ致籠居候者、其親之輕重・親疎ニ隨ひ、定式之忌受候中ニ、動向繁多之者ハ、日数之定も無之忌差免候茂、其者之規模之様ニ成行、家老・年寄等ニ至而ハ、死者襲歛ニも不取掛以前、即刻差免ニ而、参殿候も有之、又者父母之喪ハ最重之義ニ候處、七・八日ニ而差免候茂有之候、都而喪者ハ愁傷之念不絶、万事年々不附道理故ニ、期中職務を差免、暫時閑暇ニ成遣候も古儀ニ而、已ニ暇服と相唱候も、暫時之暇を為得候儀ニ付、懇ニ尋問等いたし候ハ、慰勞之厚ニ候處、喪期を縮メ愁傷之念を全破却候者、却而慰勞之筋ニ者不致候、乍然期中ニ為勤候も、又上ノ其役柄之親疎を表し候、一廉ニも相成候姿故、當時之風俗ニ而ハ程能差免も可有之候、依之此度公儀老中・若年寄等忌 御免日数之御制度ニ準、以後家老・年寄其外忌差免之日数相定候事、

家老・年寄共

忌差免日数

一 五十日ハ

三十日目差免
三十一日目參殿

但、掛り用等有之節ハ廿五日メ、或ハ廿七日目差免候儀も可有之、

一 三十日ハ

十四日目差免
十五日目參殿

半減十五日ハ七日目差免、八日目參殿

一 二十日ハ

十日目差免
十一日目參殿

半減十日ハ四日目差免、五日目參殿

一 十日ハ

四日目差免
五日目參殿

半減五日ハ二日目差免、三日目參殿

一 三日ハ

二日目差免
三日目參殿

半減二日ハ差免無之

一 一日ハ

差免無之

一 産穢七日ハ

三日目差免
四日目參殿

一流産穢五日ハ

二日目差免
三日目參殿

右差免之儀ハ、前日以剪紙忌差免ニ付、明日參殿候様可申遣ニ

付、三十日目差免と有之ハ、三十日目切紙差遣、三十一日目参殿相成候、以下同様可相心得事、

一尋之儀、忌相成候翌日可可有之、十日以上之不参三相成候ハ、兩度以下一度可有之、初度之尋ハ可為愁傷旨、二度目ハ忌中無障哉之旨尋候事、

但、一日之遠慮ハ尋無之事、

一在府・在邑留守中ニ而茂、右之日数を以差免可申候、初度尋之儀茂可有之候、二度目尋之儀ハ、便到来承知之上可申付筋ニ付、其節詰合老共連名剪紙を以可申遣候、便之都合次第ニ而差免後之日数ニも相成候得者、不差遣候事、

一家老之家ニ而も、幼年之内ハ差免無之、尋ハ可有之事、

用人忌差免日数之内

一五十日ハ

三十日目差免
三十一日目参殿

但、掛り用等有之節ハ二十五日目、或ハ廿七日目差免候儀

も可有之、

一三十日目ハ

十四日目差免
十五日目参殿

半減十五日ハ七日目、差免八日目参殿

一二十日

十日目差免
十一日目参殿

半減十日ハ五日目差免、六日目参殿

近習・歩士頭・小納戸小姓、其外側勤之者、医師等忌差免日数之内

一五十日ハ

三十五日目差免
三十六日目参殿

但、掛り用等有之節ハ、三十日目差免

一三十日ハ

十六日目差免
十七日目参殿

半減十五日ハ八日目差免、九日目参殿

一二十日ハ

十二日目差免
十三日目参殿

半減十日ハ五日目差免、六日目参殿、

用人・近習・歩士頭・小納戸小姓、其外側勤之者、医師

等忌差免日数、

一十日ハ

五日目差免
六日目参殿

半減五日ハ三日目差免、四日目参殿

一三日ハ

二日目差免
三日目参殿

半減二日ハ差免無之、

一一日ハ

差免無之

一産穢七日ハ

四日目差免
五日目参殿

一流産穢五日ハ

三日日差免
四日日参殿

右前日差免候間、明日参殿候様申遣、前と同事、

一人ハ、在府・在邑之留守中ニ而茂、右之日数を以差免、尋も可有之候、

一近習以下之分ハ、差掛り候用向無之ハ、留守中差免無之事、

一次番参殿坊主・組頭・奥坊主等茂、側近相勤候間、右之日数ニ而差免可申事、

一近習ニ而も、幼年ニ候得者、差免無之事、

一諸役人其外ハ、忌免無之事ニ候得共、用向有之不参して不叶者ハ、在府・在邑之無差別、右之日数を以差免可為参殿候事、

附

一都而忌差免無之内も、用向之品ニより文通、又者無面談して不叶儀者、其者之宅江罷越、申談等不苦事、

一家老・年寄、其外共、前件日数を以可差免事候得共、人少敷、掛り用有之敷、日数不参差支候節、又ハ四・五日之事ニて、年始ニ

も可掛呼者、右日数之内ニても差免可申候、可奉事之品ニハ、或ハ古儀三元付、其日一日差免参殿、又翌日ハ再忌ニ歸り、日数相

立差免候而茂不苦事、

右之通、此度相定候間、前以伺之上差免之儀可申達候、在府・在邑留主中不及伺可申達事、

丑十二月

〔朱筆〕
〔廿四〕

忌差免日数定候儀ニ付書付

忌差免日数、是迄先例を以取計候得共、不極之儀も有之候之間、此度老中・若年寄等御免日数ニ準候、別紙之通相定候尋之儀も、以来有之積リニ候、右者一座何茂評儀可有之処、浜松江申遣候得者、正月ニも相成候間、不及評義相定候積リ候得共、猶存寄も有之候ハ、追而可申聞候、

十二月

此書面、浜松江可遣候、

〔朱筆〕
〔廿五〕

忌中尋之儀

父母

但、実方共、

祖父母

但、同前、

妻

悴

家老
年寄

右不幸之節、使を以尋可有之、忌中以剪紙尋茂有之候事、此外忌掛不幸之節、以剪紙尋之事、

用人

父母

但、同前、

悴

右、不幸之節、以使尋有之、此外忌掛^三而も尋無之事、

丑十二月

〔廿六〕^{〔朱筆〕}
浜松着服之儀^二付、書付、

浜松綿服之儀、質素第一之事故、差支無之候得共、江戸勤番・京・大坂、其外出役等之節、絹・布調候得者、一入費用も不少、難渋たるへく候、依之以来、浜松^三而も平日ハ以綿服着用いたし、何ぞ廉立候時ハ、無地紋附計、十分ハ絹・布、輕輩ハ袖位迄着用差免、小紋縞等之紋付者、略儀之品故不相成、婦人着服之義^茂綿服計^二而ハ、市中之者共と差別もなく候間、唐津時分之趣^二而銘々相応之着用^二可致哉之事、
右之趣^二相成候而ハ、如何可有之哉、全綿服計と申候而者、却而永久之處も無差束候間、心附之処一応相認候、猶厚致評義可申越^七旨、
浜松江可申遣候事、

丑十二月

御書付

目錄

〔〇〕文政十三寅年正月^{〔朱筆〕}

〔一〕^{〔朱筆〕}一衣服之事、評儀之義^二付而之事、

〔二〕^{〔朱筆〕}一御用向^三而致出府候者、帰着之上御褒美之事、

〔三〕^{〔朱筆〕}一諸向^六御加増・御褒美・格式等申立書付、書法之事、

〔四〕^{〔朱筆〕}一青山頼母組原又右衛門、致捕手候儀^二付而之事、

〔御勝手方〕^{〔朱筆〕}

〔五〕^{〔朱筆〕}一京・大坂・大津御借財御厳法之事、

〔同〕^{〔朱筆〕}

〔六〕^{〔朱筆〕}一上方筋御借財取扱方之事、

〔同年三月〕^{〔朱筆〕}

〔御勝手方〕^{〔朱筆〕}

〔七〕^{〔朱筆〕}一大津・大坂・堺・京都御借財方御厳法之事、

〔同年四月〕^{〔朱筆〕}

〔八〕^{〔朱筆〕}一富岡加兵衛僉議之事、

〔九〕^{〔朱筆〕}一七十歳以上迄役儀相勤候者御褒美之事、

〔十〕^{〔朱筆〕}一富岡加兵衛御預之事、

〔御勝手方〕^{〔朱筆〕}

〔十一〕^{〔朱筆〕}一無尽講之儀^二付而之事、

〔十二〕一富岡加兵衛僉議口書之事、
〔朱筆〕

〔同年五月〕

〔十三〕一富岡加兵衛御仕置当之事、
〔朱筆〕

〔同年六月〕

〔十四〕一富岡加兵衛御仕置之事、
〔朱筆〕

〔同年八月〕

〔十五〕一御分限帳書損等之事、

附、司馬藤太郎他国修行之義、并大納戸手代炮術之義ニ付、

〔朱筆〕

〔同年九月〕

〔十六〕一追放之律、徒罪ニ御改革之事、
〔朱筆〕

〔同年十月〕

〔十七〕一松飾之儀ニ付而之事、
〔朱筆〕

〔御勝手方〕

〔十八〕一裏印金、其外取計方之事、
〔朱筆〕

〔同〕

〔十九〕一御困初改方之事、
〔朱筆〕

〔同年十一月〕

〔二十〕一浜松御家中着服之事、
〔朱筆〕

〔御勝手方〕

〔廿一〕一木村半六取扱方之事、
〔朱筆〕

〔同年十二月〕

〔廿三〕一山路衛介小普請入被 仰付事、
〔朱筆〕

〔〇〕一 文政十三年庚寅正月

寅正月

〔朱筆〕 衣服之儀ニ付、猶評義候様可遣候書付、

寛政六年書付之内

一初ヶ条之廉立候節者、絹・布、無地紋付ハ不苦、小紋縞等者不相成候、

但、廉立候者麻上下・縫上下着用之時、諸家通行・出役旅行・

嫁娶・其外諸事・氏神祭礼等之事、此外茂数多可有之、

一四ヶ条目同前廉立候時者、絹之羽織も可用、尤、無地紋付ニ限候

小紋等不相成候、冬者着服ニ準、同地合不苦候、

一五ヶ条目同前着服ニ準廉立候節者、今少シ宜敷品用候而も不苦候、

地合等致評義可相立候、

一六ヶ条目、越後縮地合廉相なるハ、却而弱く不益ニ候、縮差免候

上者、紋付縞と茂地合之積廉不及論事存候、

一七ヶ条目、上下者礼服故、強而地合分限ニも及間敷候、麻・絹茂

相用候事と存候、

一八ヶ条目、十徳茂上下同様礼服ニ候間、絹・紗之類茂可相用事、

一十一ヶ条目、髪飾・白衣等者、何様無益之事ニ候、諸事等之着服

模様之分ハ、今少シ宜鋪地合茂可用哉、是ハ時宜次第ニ付、評義

之上可相定候、縫糸糸無之ハ、却而出來合茂無數事と存候、模様ニ付而之縫ハ、金入も以來不苦存候、帯ハ金入之織物・天鷲絨之類ハ、無用之事、

一十二ヶ条目、日傘、家中妻・娘ニ限ニも及間敷、女子之分ハ何レ可相用哉、一体日傘ハ本儀ニ候間、男子ニ而も勝手ニ相用不苦品ニ候、

一十三ヶ条目、料理人頭・茶道坊主・組頭同格之者ハ、年始・亥猪など土分ニ準候間、着服茂、都而土分同様可相用候、尤、妻子之儀ハ、全輕輩同様可致事、

但、輕輩共も廉立候時ハ、袖無地紋付相用、羽織同様、襦も棧留・郡内平位迄ハ不苦、妻子も祝事等之時ハ、袖位迄相用不苦事、

一十四ヶ条目、召使之男女等ハ、全木綿計可相用、但、書端下女と有之ハ、家中召使之名目ニ者不相当候、矢張下女之事と存候、

右者本書ニより、荒増之處認候、以後江戸勤番、京・大坂出役其外共、別段多分之用無之相濟候様可致、勿論奢侈ニ流候而ハ不
宜候得共、領内限ニ而も、右少々ツ、ハ心之延處無之而ハ、榮辱茂不弁事ニ成行可申候、猶、厚致勤弁評儀之上可申越候、寛政六年之書付、其節又々可差越候、

寅正月

〔朱筆〕

寅正月
用向ニ而出府等いたし候者、帰着之上
褒美之儀申遣候書付、

赤星金兵衛、此度囚人差添として出府候付、目見申付候、帰着之上茂相心之褒美遣候様存候、其外差添來候者とも同様褒美取計候様存候、以來右様用向ニ而、往來致候者江者、帰着之上褒美等有之様存候、取調可申候、

寅正月

〔朱筆〕

寅正月
諸向合加増・褒美・格式等申立書付、
書法之儀ニ付、書付、

諸向頭支配合加増・褒美・格式等申立候書付、先日相定候諸役、明跡江申立候書付、書法之通ニ致し、以來差出候様可申付候、

寅正月

御別紙

〔朱筆〕

〔四〕青山頼母組原又右衛門捕手いたし候由ニ付、此度致一覽候、以來右様之類罷越候節ハ、又々致一覽候義も可有之間、兼而其頭合申出候ハ、申越候様可致候、且又右衛門義、大分老年ニ相見、未だ組役いたし居候事と存候、右様之者ハ、小頭などニ申付候ハ、自然弟子取立、都合も可然、左なく共不遠組抜いたさせ不申

ハ、廉立置候方、為励ニも可相成候、評議之上申越候様、浜松へ
可申遣事、

一加嶋屋一家之分、更ニ所之積、乍然從來之掛家ニ候間、勘弁も可
有之哉之旨、

〔御勝手方江被成下候〕

右者、京・大坂勤中茂、外金主同様ニ而、格別ニ引受候程之
実意も無之、其上京都表ニ而も、格別之趣意ヲ以頼込候事

〔五〕此度、京・大坂・大津、借財方厳法申付候上者、三地借財、
其外之入用共、一式近江領分物成を以相済候様可取極候事、

茂、一向引受も不致、聊も掛家之挙動者無之候、其上出金
高位之儀ハ、唐津以来年々之勘定ニ而、疾々元金ハ引取居
候程ニ可有之、且扶助等も並合格別ニ取扱来候者畢、以此

但、大坂十家并住友方ハ、兼而直談ニ申合置候儀も有之、尤、
常之節之手当ニも候間、此度厳法之連ハ相除、是迄約定之通

候、縦へ此度之期ニ臨、外向談方心能くいたし候とも、夫
ハ一時限之義ニ而可用筋等も無之、右一統ハ此期を不失様

取計、年数相立、格別懇意ニも相成候ハ、猶取扱方も可有
之事、

有無ニ不拘断切之積可然候、

右之外、都而見込之通、如何様とも取計可申候、

寅正月

一芸州口

御別紙

〔六〕上方筋借財取扱方、委細自筆ニ可申遣候得共、猶又一寸直書

是ハ段々不実ニ相成居候上、金主共同様ニ茂相成間數候得
共、いつれ拾ヶ年不手付内含ニ而、此節之處者色々物入凶
作与申立、当年合三ヶ年断ニ可申入候、季明之上、又々三

付も可遣存候、何様彼地懇意之者等有之候而ハ、取計斟酌茂
可有之儀、天兵衛出坂尤之事ニ存候、

一摂・河村々調達口

正月

同年三月

〔同〕

〔七〕大津・大坂・左海・京都借財内訳帳之内、

講之名目ニ相成居候而ハ、和談之時ハ宜敷、左も無之六ヶ
敷時者、甚困候物ニ候間、其節ハ修法向之儀不申出、年之
限金子不調達之趣ニて、八木之利丈ツ、も可遣哉、勘弁物
を存候、併、何れ見込通之扱ニ不相成候而ハ、悪敷候間、
前書之心得ニ而不驗立様取計方可有之候、

一有栖川口

是も談ハ不相成事と存候間、前件同様見込之利分丈を以、年限差出物入凶作等之儀、其時限り申述取扱候方ニも可有之哉、勘弁之上ハ如何様とも無拋様も、取計方可有之候、

一右同家名目講

是も前件之趣之取計方も出来可申候得共、下ヶ札之通融通出来候ハ、先懸金いたし候而も可然候、

一御番所金・郷印金口拾七ヶ条、

御番所金ハ、逆も前以断等不相成候間、其年限凶作臨時物入ニ而、公務并家中扶助も不相成趣ニて、利金之内少々充納メハいたし不申ハ、相済間敷候、年々右之取計ニ而、元金ハ明年々と申延置、弥六ヶ敷江戸江茂可申来程之時ハ、此地ニ而御勘定奉行等江之取扱も可有之候、郷印之儀も前件之趣ニて可取扱哉、是ハ拝借金かいたし、緩なる方と存候、外之取扱方等をも見合、見込之通可相成候、しかし是も前以元利断之儀ハ可致書来哉無差束候、

右之外、見込之通ニ而可然候、右様厳法之談者、平常之金談同様和融之事ニ者不参候、已是迄他家国并在所々家来上坂なといたし厳法申出候時ハ、此方見込之処、十分ニ申出シ、先方之請を不承して出立候事ニ而ハ、片便之様之ものニハ候得共、夫ニ而相済候事と相見へ、右受いたさす内割合かけ候とて申出候向も不承候、已ニ一昨年在京中、酒井修理太夫家来上京之上、大坂ハ勿論、京都

諸借財不残元利断申出候ニ付、万一講等之口々出訴可致も難計、

其節ハ宜敷頼候旨申来、心得居候処、右も其儘ニ而此節遣候も、相済居候而、何方江茂出不申候由ニ候、此度此方見込分者、格別厳法候得共、右之通ニ付、聊差支ハ無之候、其上御役中者出訴等ハ並々之口者、老ても不相成事ニ候間、無事済候事と存候、何れ受を伝候而ハ、却而六ヶ敷和融之談ニハ不参事ニ候、申捨之方修法立候元と存候、

一配当之帳面之内、百姓とも大津屋敷へ可詰哉、左すれハ名茂出可申由、是ハ聊不苦事ニ候、不筋之義ニ而、名主出候と違ひ、右様之筋ニ而名主出候者、弥以困究之義世上江相知れ、却而幸之事と存候、しかし中々大津迄ハ百姓共出兼可申候、

同年四月

寅四月

〔朱筆〕

富岡加兵衛僉義ニ付、申遣候書付

富岡加兵衛僉義之儀ハ、兼而定之趣ニ而郡奉行目付江吉人宛掛り申付可為致僉議候、尤、僉議中ハ、言葉相改尋等いたし候旨、最初目付分於其席申渡、夫分僉議可取掛候、一同道人之儀、挾之義ハ先年定之通ニ而可然候、一盗賊など、も違ひ候間、長屋入等ニハ不申付、僉議中腰物預り置可申候、

右之外、多分先年定之通ニ而可然候、盜賊等之儀とも違ひ候間、
此段申遣候、

寅四月

御別紙

富岡加兵衛義、此度之義者前以用意いたし候由相聞候、書付者左
のみ論候程之事も無之、小声ニ而一言・二言申合出、同様之事ニ
脇之者も存居候程ニ相見候、并先番婦之節居残り居候茂、前以之
用意ニ候、右等を以考候得者、過言いたし候ニ付、即座ニ及刃傷
候と之儀ニ而無之様存候、昨日最初ニ差出候口上書ハ、不審敷存
候間、兼々意趣有之處、重々相糺、当り之処も、右ニ準手続相糺
候方と存候、猶勘考之上、浜松江申遣候様存候、

五日

一僉議言葉之儀ハ、其方与申候心得ニ而、此外右ニ準可尋候、一体
上ノ尋候訳ニ付、調も相改、自己之交格をはつし相尋候事ニ候、
先年も申遣候哉と存候得共、猶郡奉行目付へ可為心得候、

〔九〕
(朱筆)

寅四月

七十歳以上迄役儀相勤候者褒美

可遣儀ニ付書付

七十歳以上迄役義相勤、老衰・病氣等ニ付、役儀相預、又者隠居
等願之通申付候時、五ヶ年以來咎筋無之分者、年寄候迄無懈怠相
勤候趣を以、相応之褒美可遣之、輕輩共儀も同様勤差免候時、褒

美可遣候、同八十才以上之者ハ、是迄之通宛伺、其儘遣可申事、
右之通、以來可申付候、輕輩共儀ハ、頭支配ノ右之趣、其節申出
候様可達置事、

寅四月

寅四月

〔十〕
(朱筆)

富岡加兵衛預之儀ニ付申遣候書付

富岡加兵衛預之儀等、先年定之通と申遣置候得共、猶先年之定相
糺候処、詮義事之品ニ付、揚り屋人等ニも不相成程之輕き品之者、
親類江預ヶ候事ニ而、此度之加兵衛義ハ、下々ニ候得者、直入牢茂
可申付程之儀ニ候間、親類預ニ而ハ相当致間敷候、一向之他人江
相預候様存候、

寅四月

〔御勝手方へ被成下〕 (朱筆)

〔十一〕
(朱筆)

寅四月

無盡講之儀ニ付書付

無盡之儀ハ百姓・町人ニ限り候事ニ而、武家ニ而者不相成候、講之
儀ハ、百姓・町人とても不相成事ニ候、然處、近来武家ニ而無盡
講など唱相催候義入 御聴、若弥相長し、表向 御沙汰有之時ハ、

小堀和泉守例杯茂候得者、不容易候、早速ニも片付候事ニ候者、此節取縮付ケ候様ニと、内々御沙汰有之相調候内、堀近江守杯之無盡ハ、主法も不宜候ニ付、為相止候様、統柄之処ヲ以、自分内々申達候方と同済候付、近日申達候積リニ候、同列衆ニも此類有之ハ、右ニ付而ハ此上追々御調茂可有之處、前件之御沙汰承り居ながら、手前之無盡等相催居候處、御聴候而ハ以之外恐入候義ニ付、手前之無盡講之類、早々相止候様取計可有之候、浜松ハ領中之事ニ付、其儘ニ而茂可然候、京・大坂・堺・大津・江戸之分ハ、常々借財か年賦証文等ニもいたし、直無盡講仕法書規定等有之分ハ、取返し焼捨ニも可致哉と存候、中ニも取退無盡之類、又者懸金ハ手取多分有之仕法、并満會後無盡講元益金等有之類ハ、何も正路之筋ニ無之候間、猶更早々取片付候様、何茂勘弁之上、早々取計有之候様存候、前書御沙汰等之儀ハ、其席限申聞候事ニ候間、決而不洩様可相心得候、

寅四月

〔朱筆〕
「十二」加兵衛口上書之内御吟味と有之ハ、兼而定之通目付立合之

吟味者、僉議与相唱候事ニ付、何も僉議与直し可申事、

一此地ニ而目付共札候者、翌日之処、当日之様ニ認有之候、

一加兵衛仕置申付候方、先例取調、評儀之上申渡方迄認可差越候、

先例之申渡振も、委細相認可差越候、

一親勝右衛門答之事をも取調可申越事、

右、浜松江可申遣候、

詰口文段之内、

一寿圭江、兼々意根有之云々、

寿圭取計方、兼々不快ニ存居候処、右様相直リ可然哉、強而

意根と申立候程之儀も不相見候、

一寿圭儀、悪口雜言申候連云々、

寿圭儀、悪口雜言申候とも、御場所柄之義、如何様とも取計

方可有之処、無其義例ニ罷在候、山崎円介外壺人を証人ニも

不相立、殊ニ無存念之趣、一応寿圭江も不申聞、一己之身分

難立と而已存詰、深思慮茂不仕、御場所柄をも不相弁及刃傷、

右疵ニ而寿圭相果候仕義ニ相成候始末、上を不恐仕方勤柄ニ者

不似合儀ニ候旨、御察当を請可申上様無御座候、

右様ニ相直リ可然哉、猶先例ニ好福馬、其外之節を茂相糺可有

差略候、

御別紙

〔朱筆〕
「十二」富岡加兵衛仕置当り之儀ニ付、寛文五年、松本頼母外式人

坊主を及切害候書拔差越候得共、彼頃者、未だ戦国之風儀も残り

居、當時とハ人情を初メ都而事違リ居候間、其儘引付候而ハ、大

分違候之儀も可有之、已ニ公儀ニ而茂御三代迄ニ漸々天下之

姿を被極候得共、享保度ニ到リ、都而御法度向相改リ候処、猶又

當時之人情ニ戻リ候哉、寛政之度ニ至リ、種々御改革有之公

儀ニおゐても古代とハ格別御振合も替り候程之儀ニテ、古代より連綿仕来候義ハ、曲り成ニも可相濟候得共、其外之法、或ハ其時勢ニ依テ可處置事ニテ、法ハ百年ニして可改トハ古江も申置候義ニ候、然れハ似寄候事トテ、寛文之頃之儀を其儘ニハ被用間敷、其上右書拔之坊主ハ、盜賊事ニ而も有之たる哉ニ承及居候、御書付面を見候而も、坊主共不屈之子細、役人江相達可受差凶處ト有之候得者、坊主对上不屈有之事と被察候、并為私土民切害候とも可為曲事候と有之候得者、已ニ寛文之頃ニ而も、人を害候義ハ重く候事と相見へ候、对上候不屈ニ而も、如此之御趣意ニ候得者、此度之加兵衛義ハ、寿圭事对上候而之不屈ハ無之、全私之憤を以不弁、場所柄をも及切害候ハ、却而寛文之書拔令ハ品不宜様ニ被存候、寿圭事格合者違候得共、町人・百姓ニも無之、家人之義ニ候得者、銘々勝手ニ致切害不苦筋ニハ有之間敷、其上右一件ハ、早速同列衆江茂咄合茂いたし置候事故、格別品替り候申付方ニ而ハ、如何可有之哉と存候、右等勘考之上、再評いたし、近代之類例をも一々書拔相添、評決之処、今一応可申趣旨、浜松江可申遣候、此外洩候義ハ、自筆ニ而申遣候様存候、

寅五月

同年六月

御別紙

〔朱筆〕

但、介錯人等不及伺見計置可申付候、

一都而前以不相響即夕ニ相成、夫々取計可有之事、

富岡加兵衛下知書到着候上考、御日柄を相除、早々取計候様存候、右ニ付入用之人ニも、直ニ可申付候様存候、勿論夜分ニ掛り取行可申候事、

右之趣、浜松江可申遣候、

寅六月

同年八月

〔朱筆〕

〔十五〕分限帳之内、取次頭取江、松原外衛かり居候如何之事、

一当時ハ留守居と申ハ無之、右之場所頭取ニ而相勤居候處、大津辺ニ而ハ、丸山彦介を留守居と相心得居候様ニ相見候、都而留守居へ可掛合義者、頭取連名ニ相達候様、序ニ申遣候様存候、
 一司馬藤太郎呼出後、為修行他国出之義不申出候哉、呼出候節も、猶又修行可相願見込ニ而申付候処、右様等閑ニ而者以後之手心ニも相成候間、模様申越候様可申遣候事、
 一浜松大納言共、度々炮術相凶丁打等相催候、軽き者ニ而ハ、主役ながら寄持之事ニ存候、定而何とか賞し等いたし候哉、

同年九月

〔朱筆〕

〔十六〕

寅九月

追放之律、徒罪ニ可改儀ニ付、

申遣候書付、

領分仕置之義、是迄 公儀御定ニ準、追放も申付候得ハ、扶少
 之領分ニ而ハ、自然人別も減候訳ニ付、古代律令之趣ニよつて、
 以後追放之分ハ、徒罪可申付与存候、仕置仕方ニハ一等ニ候得共、
 執行候時ハ、重・中・軽等之品有之候間、差支之儀無之候得共、
 改革之儀ニ付、一応何茂致評義無存寄候者、郡奉行江評儀申付候
 様存候、

寅八月

同年十月

寅十月

〔朱筆〕
〔十七〕

松飾之儀ニ付、申遣候書付

松飾之儀、少々宛ニ而も自然林之木数減候事之由ニ付、在町申付
 候内江茂認置候、明春分ハ、城向之松飾を初メ、家中輕輩迄も尺
 を相極、成丈枝松ニて相濟候様いたし、可然勘考之上可申越候事、

寅十月

〔御勝手方へ被成下候〕〔朱筆〕

寅十月

〔朱筆〕
〔十八〕

裏印金、其外取計方之儀ニ付書付

裏印金滞之分申出候而も、代官世話不行届候間、自然不都合之由、

以後急度取扱濟方相成候様可致事、

一 收納不足之分、借米ニ而補候義、近來之事ニ候、追々不為之筋ニ
 相聞候、已後裏印金之方ニ而補候様可致事、

一 用達共貸金ハ不実ニ而滞申出候節、村方を厭候而返濟申付緩候之
 様相聞候、以後実ニ困究之分、格別不実之分ハ、嚴敷返濟可申付
 候事、

寅十月

〔朱筆〕
〔同〕

寅十月

〔朱筆〕
〔十九〕

囲初改方之儀ニ付申遣候書付

囲初ハ一旦藏入いたし、又追而村方へ相渡、初式俵を米壹俵ニ摺
 立申付候間、俵実之多少ハ摺立候村方之損徳ニ候、然れハ納之節、
 嚴敷改立いたし候節者、却而年数をかけ候迄ニ候、其上年数か、
 り候得者、初之皮すれ候而、摺立ニハ米証惡敷相成由、依之以後
 者、是迄之俵実分少々立増候而、改方ハ俵之儘ニ而、初へさはら
 さる様いたし、摺立収之俵高ハ、兼而隠置候様致候ハ、下方
 ニ而も都合能可有之候、右差支も無之候者、其筋へ程能申付候様
 存候、

寅十月

同年十一月

〔朱筆〕
〔廿一〕

寅十一月
浜松家中着服之儀ニ付書付

浜松家中着服之義、先年唐津ニ而ハ本知申付候節、一統綿服之義申付由之処、其後有合着用候ニ付而、銘々絹類茂用意いたし候処、又々綿服申付而ハ新規ニ相成、八分通ハ迷惑ニ存居候由、此度猶又引米等申付候而ハ、先男女とも有合之服着用候様申付候方、銘々都合も可宜哉と存候、猶右等之儀、治兵衛杯江茂調申付、評義之上申越候様存候、

寅十一月

〔御勝手方へ被成下〕 (朱筆)

寅十一月

〔朱筆〕
〔廿一〕

寅十一月
木村半六取扱之事

木村半六事、前々家中ニ準取扱候處、大津・大坂杯ニ而ハ、外出入町人同様与心得候哉、先日渡方之儀ニ付、出入之類江加へ候而評義いたし候様ニ相見へ、左様相成候而ハ、前々之規矩も違候間、以後出入町人ニハ不相混、家中ニ準取扱候様可致事、

寅十一月

同年十二月

〔朱筆〕
〔廿二〕

寅十二月
城向門松之儀ニ付、猶又申遣候書付

城向門松之儀、来年寸尺相極候伺之通申付候、然處、先領主ニ而も、左様之義有之、町方等ニ而なにかと不都合之義申出候由、氣受も不宜哉ニ相聞候、来年之処ハ相済候得共、来々辰年ハ、是迄仕来之通可申付哉ニ存候、猶人氣等之義、治兵衛相尋勘考申越候様可申遣候、

寅十二月

〔朱筆〕
〔廿二〕

寅十二月

山路衛介小普請入申付候様申遣書付

山路衛介事、浜松江引越以来、諸稽古不出席之由、目付ハ尋候而茂不都合之答申出候、一人人柄も如何敷、其上右様諸稽古不出席之儀ニ候間、外之励ニも相成候、旁小普請入可申付候、右之趣、浜松江可申遣候、

寅十二月

目録

〔○天保二卯年八月〕 (朱筆)

〔朱筆〕一惣領除之者、養子願間敷儀ニ付 御書付、

〔同年九月〕(朱筆)

〔朱筆〕一御下知済伺書ニ、年月日記之儀ニ付 御書付、

〔朱筆〕一申渡不残可入 御覽儀ニ付 御書付、

〔朱筆〕一忌御免御定之儀ニ付 御書付、

〔朱筆〕一忌御免日数之儀ニ付 御書付、

〔同年九月 御勝手方〕(朱筆)

〔朱筆〕一五ヶ年別送之儀ニ付、小河三郎へ被成下候 御書付、

〔朱筆〕一別送御趣意之 御書付、

〔朱筆〕一別送御趣意ニ付、江戸老共江之 御書付、

〔朱筆〕一天津取扱御借財皆御断、豊田喜一斉取計之儀ニ付、御書付、

〔朱筆〕一御借財御断之御趣意之 御書付、

〔朱筆〕一一大津表御用之儀ニ付、岩本五兵衛江達し 御書付、

〔朱筆〕一一大津表御用之儀ニ付、豊田喜一斉へ達し 御書付、

〔朱筆〕一別送式千両之内、差引并廻し方之儀ニ付 御書付、

〔同年十月 御勝手方〕(朱筆)

〔朱筆〕一別送式千両之儀ニ付 御書付、

〔朱筆〕一御他家江被進候御化粧料之儀ニ付 御書付、

〔朱筆〕一江戸運送金差立候毎度届書之義ニ付 御書付、

〔同年十一月〕(朱筆)

〔朱筆〕一七張訴・捨訴之類、以来可差上旨之 御書付、

〔同年十一月、御勝手方〕(朱筆)

〔朱筆〕一御勘定帳江 御奥印之儀ニ付 御書付、

〔朱筆〕一御勘定帳紙品之儀ニ付 御書付、

〔同年十二月〕(朱筆)

〔朱筆〕一歳暮御祝儀、廿八日ニ可申上旨 御書付、

〔同年十二月、御勝手方〕(朱筆)

〔朱筆〕一別送式千両、明年分送方之儀ニ付、御書付、

天保二年卯八月

〔朱筆〕一惣領除之者、養子願間敷儀申遣候書付、

卯八月

此度柴田定右衛門事悴病身ニ付、惣領除、廣瀬辰三を養子ニ相願候、公儀御定ニ而茂、廃嫡之者養子等不相成候間、定右衛門悴

追而病氣全快候とも、昨養子願ハ不致儀と存候事、

卯八月

同年九月

〔朱筆〕一卯九月 下知済吟味書江、朱書ニ而年月日記

置候様、申遣候書付、

此度差越候伝馬町金十、其外吟味書之分、何も差図・年月日、不相分候、以来下知書相渡候時分、吟味書とちめ候處江、朱書ニ而

年月日下知書渡候奉老名前、認置候様可致候、是迄相濟候分も取調分候分者同前、認め置候様可致候、

但、吟味書者何も当番所江留至候事と存候、

卯九月

卯九月

〔三〕
〔朱筆〕
申渡書為見可申旨書付、

士分輕輩、下々中間等迄、又ハ出入町人へ申渡之儀ハ、不殘申渡を為見可申候、

右之通、以後兩地とも可相心得事、

卯九月

卯九月

〔四〕
〔朱筆〕
忌差免日数之義、再考之上相定候書付、

忌差免日数定之義、昨年浜松へ申越候趣も有之、再考候不差免日数之義ハ、以來別紙之通ニ相定候、尋之義ハ、逐而可定候間、夫迄ハ文化程度相調候通ニ可取計候、

卯九月

「去丑年被成下候 御書付、又候被成下」〔朱筆〕

〔五〕
〔朱筆〕
一 忌差免日数定候儀ニ付書付

忌差免日数、是迄先例を以取計候得共、不極之義も有之候得、此度老中・若年寄等御免之日数ニ準し、別紙之通り相定候、尋之儀も、以來有之積リニ候、右者一座何も評議可致候処、浜松江申遣候得者、正月ニも相成候間、不及評議相定候積リニ候得共、猶存定りも有之候ハ、逐而可申聞候、

十二月

此書面、浜松江も可遣候、

丑十二月

忌差免日数相定候書付

二

親族之忌中ニ致罪居候者、其親之輕重・親疎ニ随ひ、定式之忌受候中ニ、勤向繁多之者ハ、日数之定も無之、忌差免候方、其者之規模之様ニ成行、家老・年寄相至而ハ、死者襲斂ニも不取掛、已前即刻差免ニ而、參殿候も有之、又ハ父母之喪ハ最重之義ニ候處、七・八日ニ而差免候も有之候、都而喪者ハ愁傷之念不絶、萬事手ニ不附道理故に期中職務を差免、暫時閑暇ニ成遣候方、右義ニ而巳ニ暇服と相唱候も、暫時之暇を為得候義ニ付、懇ニ尋向等いたし候者、慰勞之厚ニ候處、喪期を縮メ愁傷之念を令破却候者、却而慰勞之筋ニハ不至候、乍然期中ニ為勤候も、又上ハ其役柄之

親疎を表し候一廉ニも相成候姿故、当時之風俗ニ而者程能差免も可有之候、依而此度 公儀老中・若年寄等忌 御免、日数之御救度ニ準し、以後家老・年寄其外忌差免し日数相定候事、
家老・年寄共忌差免日数、

一 五十日ハ 三十日差免
三十一日ハ参殿

但、懸り用等有之節ハ廿五日目、或ハ廿七日目差免候之義も可有之、

一 三十日ハ 十四日差免
十五日ハ参殿

一 二十日ハ 半減十五日ハ七日目差免、八日目ハ参殿、
十日目差免
十一日目ハ参殿

一 十日ハ 半減十日ハ四日目差免、五日目ハ参殿
四日目差免
五日目ハ参殿

一 三日ハ 半減五日ハ二日目差免、三日目ハ参殿、
二日目差免
三日目ハ参殿

一 一日ハ 半減二日ハ差免無之
差免無之

一 産穢七日ハ 三日目差免
四日目ハ参殿

一流産穢五日ハ 二日目差免
三日目ハ参殿

右差免之儀ハ、前日以剪纸忌差免ニ付、明日ハ参殿候様可申遣ニ付、三十日目差免与有之ハ、三十日目剪纸差遣、三十一日目ハ参殿ニ相成候、以下同様可相心得事、

一 尋之儀、忌相成候翌日ハ可有之候、十日以上之不参ニ相成候ハ、兩度以下ハ、一度可有之、初度之尋者可為愁傷旨、二度目ハ忌中無障哉之旨尋候事、

但、一日之遠慮者尋無之候事、
一 在府・在宅留守中ニ而も、右之日数を以差免可申候、初度尋之使も可有之候、二度目尋之儀者便致、忌承知之上可申付筋ニ付、其節請合、老共連名剪纸を以可申遣候、便之都合次第ニ而差免後も、日数も相成候得者、不差遣候事、
一家老之家ニ而も、幼年之内者差免無之、尋ハ可有之事、
用人忌差免日数之内、

一 五十日ハ 三十日目差免
三十一日目ハ参殿

但、懸り用等有之節ハ、二十五日目、或者廿七日目差免候義も可有之、

三十三日ハ 十四日目差免
十五日目参殿

半減十五日ハ七日目差免、八日目参殿、

二十日ハ 十日目差免
十一日参殿

半減十日ハ五日目差免、六日目参殿、

近習物頭・小納戸小姓、其外側勤之者、医師等忌差免、
日数之内、

二十五日ハ 三十五日目差免
三十六日目参殿

但、懸り用等有之節ハ、三十日目差免、

三十日ハ 十六日目差免
十七日目参殿

半減十五日ハ八日目差免、九日目参殿、

二十日ハ 十二日目差免
十三日目参殿

半減十日ハ五日目差免、六日目参殿、

用人・近習物頭・小納戸小姓、其外側勤之者、医師等忌
差免日数、

十日ハ 五日目差免
六日目参殿

半減五日ハ三日目差免、四日目参殿、

三日ハ 二日目差免
三日目参殿

半減二日者、差免無之、

一日ハ 差免無之

一産穢七日ハ 四日目差免
五日目参殿

一流産穢五日ハ 三日目差免
四日目参殿

右、前日差免候間、明日参殿候様申達、前々同事、

一人ハ在府・在宅之留守中にも、右之日数を以差免、尋も可有
之候、

一近習以下之分ハ、差懸候用向無之ハ、留守中差免無之事、

一次番茶道坊主・組頭奥坊主等も、側近相勤候間、右之日数ニ盤差
免可申事、

一近習にても幼年ニ候得者、差免無之事、

一諸役人其外ハ忌差免無之事ニ候得共、用向有之、不参して不叶者
ハ、在府・在宅之無差別、右之日数を以差免可為参殿候事、

附

一都而忌差免無之内も、用向之品ニより、文通又ハ無面談して不叶
義ハ、其者之宅江相越申談等不苦事、

一家老・年寄、其外共前件日数を以可差免事ニ候得共、人少敷掛り
用有之敷、日数不参差支候節、又ハ四・五日之事ニ而年始ニも可

掛時ハ、右日数之内ニても差免可申候、可奉事之品ニより、或ハ古義ニ元付、其日一日差免參殿、又翌日ハ再忌ニ歸り日数相立、差免候ニも不苦事、右之通、此度相定候間、前日伺之上差免之儀可申達候、在府・在宅留守中ハ、不及伺可申達事、

丑十二月

「同年九月、御勝手方江被成下」(朱筆)

〔六〕(朱筆)

小河三郎へ

其地借財方取扱六ヶ敷趣、逐々聞及候間、此表運送金七千兩之処、当年ハ五千兩之高ニ相定申付候、手元并奥向打切を、初日用之分ハ、大凡割合通りニ相濟候得共、作事其外少しツ、之臨時も有之候、第一御役方并臨時権門、何分省略難出来、存外も出高相成候、且、借財方之義、遊金も無之間五千兩之外ニ而取扱、借財ニ借財を重ね、当時ニ至り融通之通閉塞候、減高申付未た一ヶ年茂不相立不都合之至ニ候得共、当時之趣ニ而者、今日之暮方ハ勿論、公務をも兼、并且忠邦昇進之支ニも相成候段、不得止義ニ付、五千兩之外此節ハ五ヶ年之間、年々二千兩ツ、別段運送候様可取計候、尤、運送高之内へ加候而者、借財方等へ紛込、条理不立様成行候而者、如何ニ付、小納戸へ相廻し、一々老共断を以相渡候様、嚴

重ニ取計度候、右之義も相差可申候、

右者、其地吟味役ともへ並体ニ申付候とも、不伏之義ハ昨前ニ候間、方埒之勘弁を以吟味役相論候とも、如何様ともいたし、五ヶ年之間別送取計可申候、此義出来不致候者、忠邦存寄も有之事ニ候間、厚相差候而取計可申事、

卯九月

「同」(朱筆)

〔七〕(朱筆)

趣意書付

此表運送金之義ニ付、此度小河三郎江書付遣候、此節八年々別段二千兩ツ、五ヶ年之間相送り候様申付候、右者昨年清兵衛出府之節、当分五千兩ツ、可相濟候之旨、吟味役へ相尋候處、浜松早送候而、一向出方も無之趣ニ候上ハ、不得止義ニ付、右高ニて取計可申旨申出候、忠邦存念ニてハ、千兩位ハ可減哉、二千兩之減ハ、逆も不整事と存候得とも、一家之為メニ候間、一金ニても減少候得者、両地之都合も宜敷、金量之義と存込、減方之義も談候申付候而、其通之分ハ割合之通減付候、臨時ニ申候とも格別之義者無之候、然處、御役方之義ハ内向之節儉者出来候得共、外向省略一向不致出来、譬ハ同列衆引込見廻之進物、師伝通ニ取計来り候處、外並ハ度數少候間、繁候ニ相成、其外都而昨年ハ事殖候而、一

ケ年千兩積り之外、当七月迄金弁当相濟候分、九百四十兩程相成、此外いまた不相分候、権門方之義も定式之分ハ、少し之増減有之候得共、臨時出羽殿入来、兩度之處ハ三度ニ相成、上屋敷計ニ而ハ慰ニも不相成候ニ付、下屋敷へと好有之、是迄大和守一同之處、氣詰リニ付、別日之振ニ相成、此間者奥方も入来有之、又此方も彼方へ罷越候義、同様度数相増、奥向子供も差遣候、右出會之入用一日にて五・六千兩、又者百兩余ニ相成候事も有之、平常之音信も隔月ニハ少々品立候物、料金など相送、又ハ彼方より高金之品物致来之節ハ、必返礼ハ新調、或ハ料金ニ而相送候、此金高式・三十兩、五・六十兩、又ハ百兩位之事度々有之候、并御取次其別へも不絶、少しつゝ之品ハ差送候義、何も當時並合ニ相成居候、殊ニ度々出羽殿出會有之間、近来取分懇意之事共ニ付、右取扱ニ於て、節儉筋ハ聊も不致出来候、当年七月迄、用代相渡候分四百四拾六兩余ニ有之、未払分三・四百兩ハ可有之由、尚又近日奥向ハ彼方へ參り候様ニとの事、此方へも年内にハ今一度位も入来可有之、并当暮迄之臨時進物も、余程入用可有之候、三田屋敷三度之招ニ付、疊替・庭向之入用、其外少しツ、之事ハ、手元ニ而も余程出金いたし候得共、総而之義ハ不行届事ニ候、此前逐々跡分申出候分も、余程可有之候、且借財方之義ハ、別段取扱と申有金も無之、運送金之外にて新借いたし取計、前件同様不足之分も、別段借入いたし補候訳にて候得共、聊も返弁無之事故、最早出金之口も相塞、已ニ去々年来并当春来之町方も段々相滞、当盆

前後とも一錢も払方無之、御覽甚不宜候間、愈以出金之道ハ絶、并用向申付候共、同家之類先日用弁改申出候程之義ニ有之候、此後とも同様にてハ、弥以不評判相募、忠邦昇進之差支ニも相成可申候、依之勘弁候處、昨年迄ハ運送七千兩ツ、も積り申付之通、手配いたし候へ共、浜松も段々融通差支、此上ハ下方迷惑ニも可及様子ニ付、此地ニ而も減少相成候丈ハ致省略、都合付申可存、運送高相減候處、前件之次第ニ而、公務并権門入用不任心底事ニ候、此外借財取扱逆も、有様諸向閉塞之義ニ候間、少々融通付置不申而者、急成節儉之用弁も難出来候、旁以昨年迄之通、此節今年々別段二千兩ツ、相送候様申付候、右之通申達候ハ、浜松吟味役ハ、甚不伏之事と存候、昨年相極其事未た一年も不隔候而申遣候間、其処ニ於て不伏者尤之義ニ候得共、半年にてさへ不足見立候間、当暮に及候ハ、成行可申哉、今日之義ニ支候時ハ、勤向へも響候事ニ候、已ニ当盆及同列衆へ見廻之品調達も兼出来候程之義ニ付、不一方不安心之事ニ候間申付候、一体豊田喜一斉見込ニ而、万事江戸表にてハ不弁理之方宜敷、借財など一向不出来様閉塞候様ニいたし度旨申候、浜松吟味役も同様之存念と被察候、是ハ在所分不足金臨時等、何程ニても申遣次第、早速送金出来候向者左も可有之、当家など之振合にて江戸表ハ用弁不相成、在所よりハ不相送、夫にて宜敷と申義一向趣意不相分事ニ候、畢竟此度ハ、浜松不都合之趣年込忠邦存寄を以、二千兩高相減候處不行届ニ付、又々元ニ服し二千兩高相送候様申付候事故、不伏等之義

ハ有之間敷候得とも、何も之心得ニ一応申聞候、小河三郎ニも厚
相差居、いか様ニも致工夫、此節令二千兩ツ、年々相送候様可取
計候、扱々五ヶ年も過候者、模様付候義も可有之与差居候、

右も忠邦昇進之支ニも相成候間、程々勤弁之上申付候得とも、万
一迎も運送不致義ニ候者、外ニ存寄も有之候間、早々申越候様可
申遣事、

卯九月

〔同〕(朱筆)

御別紙

此度小河三郎へ申遣候一条相整、二千兩ツ、別送候ハ、当春来
浜松ニ而引受候、他家へ之化粧料之分ハ如元、此表引受ニいたし
可申候、此義心得ニ可申遣候、

卯九月

〔同〕(朱筆)

〔八〕(朱筆)

江戸
老共へ

此度当表へ年二千兩ツ、別送之義ニ付、小河三郎江書付遣候、
下地吟味役とも不承志之筋故、一通リニ而ハ不整義と存候間、小
河三郎老人江引受取計候様申付候、殊忠邦勤向にも拘り候間、不
一方厚相差候義とハ存候得とも、万一不整候節ハ、無抛存寄之趣

申付候品^〇可有之候ニ付、此義而已別段ニ何も可相心得候事、

卯九月

〔同〕(朱筆)

〔九〕(朱筆)

卯九月
大津取扱借財向皆断候様、喜一齊へ為取計候
ニ付、申付之書付、

豊田喜一齊

右者支度次第早々出立、浜松へ立寄申断之上、大津へ相越、御番
所金・御代官金・講金・名目金、其外共不殘断切ニ取計、無擔分
ハ少シツ、取扱いたし、年々近郷収納之内より式千兩餘ツ、浜
松へ相廻し候様取計可申候、

一大津表ニ而当年之収納分金主方へ渡ニ相成、前件式千兩之出方無
之候者、当年之所ハ右金主方再借、又ハ新借ニいたし、式千兩高
品々浜松へ相廻し、明年分ハ主法通り金主へ相渡、残式千兩余不
殘浜松へ相廻し可申候、

一大津蔵屋敷ハ、近郷領分中へ引移可申候間、早々可取計候、近郷
収納も以後地払ニ可申付候間、相心得可取計事、

右取計之義、喜一齊へ委細申付候間、早々為致出立為取計可申候、
五兵衛義出立見合、喜一齊一同出津、同人見込之通為取計可申候、
五兵衛差略を以、喜一齊へ申付候取計不調候而者、甚以不束之筋
ニ候間、厚相心得、喜一齊申談可取計候様、五兵衛へも可申付候、

卯九月廿五日

〔同〕(朱筆)

〔十〕(朱筆)

喜一齊へ相渡、浜松ニ而ハ五兵衛へ可相渡候、
借財断候趣意

勝手向不如意ニ付、逐々金子借用勤来候處、領分年々損毛有之、
此節ニ至り弥以及困究、京・大坂兩度発足前之拝借金上納ニ差支、
恐入当惑至極ニ候、依之右上納相济候迄、無抛借財向、元利相断
候事、

右之趣意ニ而諸向断可申候、
但、前件之通断申聞候とも、何角申出候、是非返済・利济等いた
し候様申出候、兩度之上納金不納候とも、其者之元利へ返済いた
し、不苦との書付可差出旨申達、書付差出候ハ、尚又嚴敷取計
方も可有之候間、其節ハ可伺越事、

〔同〕(朱筆)

〔十一〕(朱筆)

喜一齊、此地ニ而申渡候後、浜松ニ而五兵衛江
可申渡事、

此度大津表主法之義ハ、直ニ申付候義ニ付、一々取計之事、伺候
義有之時ハ、浜松へ不及申遣、直此地へ可伺越候、大津着発其外

之義とも、此地へ可申越候、浜松へ拘り候義者、同所江茂可申遣
候、

卯九月

〔同〕(朱筆)

〔十二〕(朱筆)

喜一齊へ可申渡事

喜一齊義、浜松へ引取候者、三・四日候、支度ニ而早々大津へ可
為越候、其上申付候通、急度取計可申候、
右喜一齊へ申渡書付相渡、浜松へも申遣、五兵衛へ同様申渡候様
可致候、

卯九月

〔同〕(朱筆)

御別紙

此度上方借財皆断相成候而、万一出訴等いたし名前出候義も可有
之、是ハ一向不苦事ニ付、其心得ニ而可取計旨、喜一齊へ可申付
候、

同

喜一齊差扣三十日立可差免候、
一喜一齊浜松へ着候ハ、此地ニ而今日申渡候通、三・四日ニ而成

丈早メ為出立候様可申遣候、

〔同〕(朱筆)

二而ハ、何方迄も小納戸へ盤才覚之金子不足之節、其時限ニ相渡候姿ニいたし度候間、浜松吟味役分も、此表同役人ハ、右之式千両之義、何とも不申越候様致度候、此段相心得、浜松へ申遣候之様存候、

卯十月

〔朱筆〕
〔十三〕

卯九月
別送式千両之内、差引并廻し方之義書付、

此度式千両別送三付、臨時送金之義、昨年迄定之通可相心得候、

一当年分浜松引受と相成候化粧料、其外臨時之分三百三拾七兩式分者□米余考、此度別送式千両之内ニ而引落可申候、

一別送式千両高之内、別件差引、

一三百兩 卯十月下旬

一三百六拾兩余 卯十一月中

一千兩 卯十二月中旬

右之通可送候、明年より之割ハ、追而可申付候、

卯九月

〔同〕(朱筆)

〔朱筆〕
〔十五〕

卯十月
化粧料等吟味役持不相成候義ニ付書付、

他家へ送り候化粧料等、当年浜松持之分、以後此表引受ニ相成候得とも、吟味役方引受ニ相成候而考、全臨時之事ニ相成候間、矢張吟味役引受ニ無之、此度分相廻候別口式千両之内分、以来可為渡候間、其心得ニ而取極候様存候、

卯十月

〔同〕(朱筆)

〔朱筆〕
〔十六〕

卯十月
江戸運送金差立候毎度届書可為差出旨、申遣候書付、

此度別送式千両之義ハ、此地吟味役承志ニ候得考、気分之緩ニも相成、又々不足勝ニ相成候而ハ、折角之趣意も不相立候間、此表

月々江戸へ運送いたし候金銀錢、浜松差立候、毎度惣高内訳定高金扶助米、代給金、其外とも出訳候届書吟味役分為差出、便之序

ニ勝手方々一々可差越候、一ヶ年相済暮ニ到、前年之送金内訳とも一緒ニ認為差出、是又可差越候事、

卯十月

同年十一月

〔朱筆〕
〔十七〕
卯十一月
張訴・捨訴之類、以来差越候様
申遣候書付、

張訴・捨訴之類、度々有之、是迄ハ不差越候得共、以来其筋々差出候ハ、開判一覽之上、便次第可差越候事、

卯十一月

〔同年十一月、御勝手方被成下〕〔朱筆〕

〔朱筆〕
〔十八〕
卯十一月
勘定帳へ奥印可致存候付申遣候
書付、

以来年々勘定帳へ奥印可致と存候、以前ハ書出しなどへも御直印有之候間、其頃之年々勘定帳などハ、別而御直印可有之与存候、古代之處相糺可申越候、若又不相分候ハ、當時之處ニ而老共初連名いたし候奥江可致直印、雛形書付可伺候事、

卯十一月

〔同〕〔朱筆〕

〔朱筆〕
〔十九〕
卯十一月
勘定帳紙品之義申遣候書付、

勘定帳奥印いたし候間、清帳ハ難村紙面之内大美濃紙等、何そしかといたし候紙ニ而仕立可申候、外ニ中美濃紙ニ而写、式帳相添可差越候事、
卯十一月

〔同〕〔朱筆〕
御別紙

別紙運送書付ハ、此地へ留至候様可致候、
一此地へ運送金書付吟味役々差出候、以来銘書いたし差出候様可申

達事、

同年十二月

〔朱筆〕
〔二十〕
卯十二月
歳暮祝儀廿八日ニ可申上旨申付候
書付、

歳暮祝儀家中之者申上候儀、是迄大晦日ニ候処、以来者廿八日四時揃位ニ而可為申上候、老共・用人共義ハ、当朝・当日も祝義申上候節、直ニ歳暮之祝儀と可申上候事、

右之通、在江戸とも相改可申候、

卯十二月

「同年十二月、御勝手方へ被成下」(朱筆)

〔廿一〕

卯十二月
別送式千両、明年の送方之義申付候
書付、

別送式千両之義、明年の左之通小納戸へ可相廻候、

一式千両

内廣連院様・蓮寿院・豫姫へ年々送り候化粧料の三百金ハ、

浜松持之義ニ付、是迄之通り月割ニ而浜松吟味役より此表

吟味役江可相廻候、

残

千七百両

内七百両ハ、春の六月晦日迄ニ都合次第、一度ニても幾度ニ

も小納戸へ可相廻候、

一千両ハ、十一月晦日迄ニ、是又都合次第、小納戸へ可廻候、

卯十二月

《Summary》

Kankenroku and *Hamamatsukokurinroku* (3):

Transcription

By Naomi KANZAKI

This is a reprint of the Hamamatsu Domain's statute book, "*Kankenroku* and *Hamamatsukokurinroku*" written by Tadakuni Mizuno. The first and second parts of this reprint have already been published in "*JOSAI KEIZAIGAKKAISHI Journal of Economics*". However, due to its postponed publication, the reprint from the third part to the end will be published in "*JOSAI UNIVERSITY BULLETIN, THE DEPARTMENT OF ECONOMICS*". Out of "*Kankenroku* and *Hamamatsukokurinroku*", Vols. 4, 5 and 6 of "*Hamamatsukokurinroku*" are published this time, covering 1829–1831. Most of the statutes were issued to the Hamamatsu Domain's vassalage while some of them were to its people. The original is currently in the possession of the Library, Tokyo Metropolitan University.